



梁山一步談

附 作者 山東京傳
 垣の柳に鞠香の界 叔實徳の
 衣紋流

兼 峯の橋も牧笛と花の枝は
 上 板元通油町

13
 2056
 7





水滸傳元人施耐菴所著羅漢冲亦補之
 雖釋說以て自教と垂ふ足れを奇とみるに堪
 たり嘗て通信の書世に行るといふも未解
 易覽しるを得と今也書肆
 乃を小諾しと文を絶てすし其莊道と記
 且紅翠齋の画紙需て尺童を翫弄と授く
 尚追々數編と續て一部全うとあんとん
 欲而已

京傳序



水滸傳

甲斐の海
わりの海
の巻の海
ついでに海
附とに海
あつて海
りて海
方よ海
可の海
中よ海
ひよ海
小よ海
して海
天の海
中よ海
らん海
よよ海
今よ海
言よ海
さよ海
初よ海
のよ海
の時海
天よ海



大尉の海
ついでに海
附とに海
あつて海
りて海
方よ海
可の海
中よ海
ひよ海
小よ海
して海
天の海
中よ海
らん海
よよ海
今よ海
言よ海
さよ海
初よ海
のよ海
の時海
天よ海



大尉
洪信

住職



此の天師の杖を履めててやふ
 けりて日世さきとをせられ
 より多かるるしゆくせり
 三九のふとならるるさきか
 小仁のふとならるるさきか
 けりて日世さきとをせられ
 より多かるるしゆくせり
 三九のふとならるるさきか
 小仁のふとならるるさきか

王馬官
 晋卿



此の天師の杖を履めててやふ
 けりて日世さきとをせられ
 より多かるるしゆくせり
 三九のふとならるるさきか
 小仁のふとならるるさきか
 けりて日世さきとをせられ
 より多かるるしゆくせり
 三九のふとならるるさきか
 小仁のふとならるるさきか

撃閑
 高休



附リ 作者 山東京傳
是に史家此豪傑の五紋の
法頭

梁山歩談

并 彼ふり花れ山賊の百八の
星魁

中板元通油町 法とわ

かくては... 大尉高俣... 教頭王進...
 大尉高俣... 教頭王進...
 大尉高俣... 教頭王進...



大尉高俣

教頭王進

大尉高俣

教頭王進

太尉高俣

朱武揚春の
 九紋龍の
 史進の
 神機軍師
 朱武
 白花蛇
 揚春



王四の
 史進の
 神機軍師
 朱武
 白花蛇
 揚春



史進は月夜にありて渭州とて家に来りて進
 大男の初めはひげおとるも人なほあつたけい
 府の一人は軍曹達とて人なほあつたけい
 たりまゝあつたけいなりてあつたけい
 史進は月夜にありて渭州とて家に来りて進
 大男の初めはひげおとるも人なほあつたけい
 府の一人は軍曹達とて人なほあつたけい
 たりまゝあつたけいなりてあつたけい

李忠

萬州録



九紋龍

提轄
魯達



作者 山東京傳

附 盛の花に禅杖の酔ふ満る

仁王に腕

梁山平家伝

并 隈より月乃戒刀の賊と除る系

下板元通油町



氏名

かくそ二人酒をのこすはなすは依のそ
 のちがきすまのしちりた女のけく
 こを切はまりたれをき達
 太きたけりそのゆへに
 十人のけすあま平むらり
 のらう人へい出ればけい
 すあはせとあうあう
 乃めん志とくせと名取
 翠連といひあはれとこひ
 のゆえをきりてはたむらり
 おやこりたるのゆへに
 けりあてはくとあま
 鄭君あまりの志とまはて
 こをききあうあう
 知るやんきいさ
 ろとあはれひんのとれ
 けりひんきんとあて
 竹目もえん
 めんし
 まる史進



く



五
 文殊院
 智真
 和尚



山
 今
 の
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

